

富士見市道徳教材資料

# ～自分の生きる道～

2012年ロンドンパラリンピック  
柔道73kg級 5位入賞  
富士見市在住 高橋 秀克さん



富士見市教育委員会

～自分の生きる道～ 高橋 秀克

たかはし ひでかつ

「一本！」

その瞬間、高橋秀克選手の目は、天井から降り注ぐ照明の光をかすかに感じていた。満席の会場に湧き起こる声援。

「負けた……。でも……。」

二〇一二年八月、ロンドンパラリンピック視覚障害者柔道七十三kg級、三位決定戦。メダルを逃した高橋選手だったが、その顔は晴れやかなものだった。

秀克が柔道を始めたのは、みずほ台小学校四年生、十歳のときだった。本郷中学校へ進学すると、柔道部に入部。毎日の練習は厳しかったが、試合に勝つことがうれしく、柔道を続けた。他の選手より筋力があつたので、得意の内股うちまたを生かし、高校でも柔道部の中心選手として活躍した。しかし、卒業後は仕事が忙しく、柔道から離れることになった。

二十歳のとき、柔道を習っていた道場の館長が亡くなった。秀克は館長の思いを受け継ぎ、仕事をしながら子どもたちに柔道を教えることになった。しばらくの間、柔道から離れていたが、子どもたちの頑張る姿を見るうちに、柔道の楽しさを改めて感じ、自分自身も段位取得に向け再び練習に励むようになっていた。

仕事と柔道の指導で充実した日々を送っていた秀克。しかし、二十五歳のときに、人生の転機が訪れる。コンタクトレンズを作ろうと訪れた店で、眼科の受診を勧められたのだ。そういえば、以前から見え方に違和感りよくないしょうはあつた。

病院で受けた診断は「緑内障」。今はまだ視野が半分残っているが、やがて失明していくことが分かったのだ。

「何でこんなことに……。」

運転をすることができなくなったので、仕事を辞めなくてはならない。目が見えなくなれば、これまでと同じ生活を送ることはできない。日に日に失明の恐怖が秀克を襲う。

「終わった……。」

目の手術のため入院した病院の個室で、一人泣いた。

そして考えた。これから、いろいろなことができなくなっていく。それならば、自分には何が

残るのだろう。自問自答を繰り返す日々は、二年以上にわたって続いた。

それでも秀克は、柔道の指導を続けた。見えなくても、組み合うと相手の技の上達を肌で感じる事ができる。子どもたちの成長に喜びを感じるうちに自分も負けては行けないという気持ちになってきた。徐々に見えなくなる中で、柔道が心の支えとなっていく。

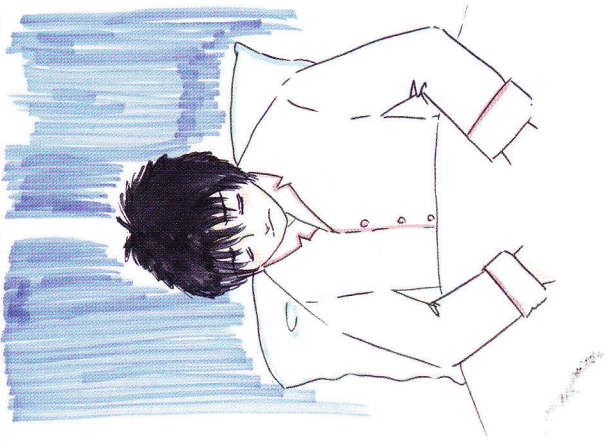
また、三十三歳のとき結婚し、結婚したことをきっかけに、川越にあるはなわほきいものがくえん 塙保己一学園（県立盲学校）の医療科に入学した。そこで、目が見えなくても明るく元気な仲間と出会い、励まされ、三年間勉強し、鍼灸しんじゅう マッサージ師の国家試験に合格した。

秀克が視覚障害者柔道と出会ったのは、三十五歳のときだった。また選手として戦うことができる。一生懸命やってきたことを見てもらうことができる。同じような障害がある人やボランティアの人と出会い、世界中の人とつながることができる。いつしかパラリンピックへの出場が目標になっていた。

視覚障害者柔道の試合は、両者が組んだ状態から始めるが、基本的なルールは健常者の柔道とあまり変わらない。相手が見えないので、実際に組むまで相手の体格が分からない。外国の選手は腕力が強く、技の掛け方も日本の選手と違う。内股が得意な秀克であったが、外国の選手と対等に戦うために、新しい技が必要だった。そこで更に筋力をつけ、寝技ねわざを鍛えた。数年で耳の形が変わってしまうほど、練習を重ねた。負けたときにこそ得られるものが多いと、負けた試合を思い返しては、何が足りなかったのかを考えた。

こうして、全日本視覚障害者柔道大会やアジアパラリンピックで優勝。二〇一〇年の世界選手権で七位に入賞し、ロンドンパラリンピックへの出場権を得たのだった。

ロンドンパラリンピックへの出場は、四十二歳のとき。年齢的に、最初で最後のチャンスになるかもしれない。金メダルを取って、子どもたちに見せてあげたい。しかし、体力のある若い選手との戦いは厳しいものになるだろう。パラリンピックに向けて、今まで以上に厳しい練習に取



り組んだ。

パラリンピックの初戦はベラルーシの選手と戦い、勝利。二回戦の相手は前回大会優勝のメキシコの選手。善戦するも敗れてしまう。これで、金・銀のメダルの可能性はなくなった。残るは銅メダル。午後の敗者復活戦へ希望をつなぐこととなった。

午前中の二試合を終え、休憩時間。秀克の体は筋肉痛で動かない。足もけいれんしていた。しかしメダルへの気持ちは切れていなかった。三試合目となる敗者復活戦の相手はイランの選手。組み手が変則的で難しい相手だが、一本勝ち。

そしていよいよ、銅メダルがかかった三位決定戦。腕力の強いロシアの選手が相手だ。次が四試合目。ここまでの試合で体力は限界に達している。試合が長引けば不利になる。早めに勝負を仕掛けにいったそのとき、秀克の体が宙を舞った。

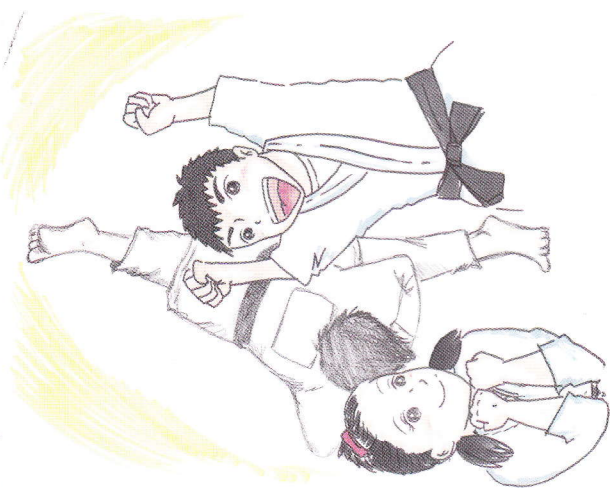
一本負け。あと一步のところまでメダルに手が届かなかった。しかし、試合を終えた秀克は晴れやかな表情だった。

「素晴らしい舞台に立てて本当によかった……。」

惜しくもメダルは逃したが、秀克の心は満たされていた。

ロンドンパラリンピックを終えた後、柔道五段を取得した高橋秀克選手、再び新たな目標をもち、今

も努力を続けている。パラリンピックという大舞台おおぶたいで見ることができた素晴らしい世界を、もう一度見たいと思う願いと、指導している子どもたちには、まだまだ負けたくないという強い気持ちをもち続け、日々、子どもたちと組み合い、柔道を生活の一部として楽しんでいる。



#### ■作成委員

貴志 祐子 (元針ヶ谷小学校 校長)

金子 裕美 (水谷小学校 教諭)

影森 里美 (関沢小学校 教諭)

後藤 輝明 (みずほ台小学校 教諭)

竹内 千尋 (富士見台中学校 教諭)

広岡 由衣 (西中学校 教諭)

伊藤 将瑛 (勝瀬中学校 教諭)

小峰 夏子 (みずほ台小学校 教諭) 【挿絵】

#### ■事務局

石井 勝博 (富士見市教育委員会学校教育課指導主事)

#### ■発行

富士見市教育委員会 平成二十七年三月